

佐藤卓己編、日本ナチ・カルチャー研究会『ヒトラーの呪縛』（飛鳥新社 2000年）

井上茂子

第二次大戦後、ドイツ研究者は、ドイツの歴史の中でなぜナチズムが誕生し、あのように暴走したのかの問いを絶えず抱えてきた。研究者たちがドイツに興味を抱いたきっかけの多くが、ナチズムへの関心であるし、一般市民からもナチズムについてよく質問されるからである。その場合、ナチズムは「否定的参照点」すなわち歴史の「反面教師」であった。

ところが、このような「ナチズム克服」を出発点とする問題意識とは異なった角度からナチズムを「魅力的」に感じ、そこから創造力を開花させて作品を作る人々や、そのような作品やナチの遺物を堪能する人たちがさらに多く存在する。それもこの日本においてである。たとえば、親衛隊の将校が冷酷・有能でそれゆえに強烈に魅力的な敵役になっている戦争漫画や映画、ナチの残党による世界制覇計画がモチーフになっている小説は、枚挙にいとまがないし、軍事マニアにとっては、ナチ・ドイツの兵器は高性能で機能美に満ちた憧憬の対象である。もちろんこの種のものは、サブ・カルチャーで、たいていの場合大衆娯楽の「悪趣味」な部類にしかすぎない。しかし、研究者がナチズムを否定的参照点とする現状と、ナチズムが大衆文化において「悪の美学」で人々を引きつけている現状とは、ナチズムを「悪のメートル原器」とする点において構造的に共通している。その意味では、ナチズムは現実世界で打倒された後も、人々の意識の世界で生き延び、本書カバー裏にあるように「第三帝国は記憶の戦争に勝利した」と言える。

本書は、このような日本の大衆文化におけるナチ・カルチャー現象を、研究者（と研究者の卵）が総合調査した本邦初のものである。プロジェクト・リーダーは、メディア史の観点からドイツ史を鋭く切り込んできた佐藤卓己氏。氏の演習・講義に参加した院生5人と、ゼミ卒業生で新聞社・出版社・メーカーに勤務する3名がプロジェクトに参加し、佐藤夫妻（40歳前後）以外はすべて二十代半ばの若者による研究報告である。本書の構成は以下のようになっている。

序章 日本人にとって「ナチカル」とは何か（佐藤卓己）

第一章（ジャーナリズム）「政治的に正しい」ジャーナリズムのヒトラー（羽柴康人）

第二章（ミリタリー&プラモデル）密室のナチ趣味、消費砂漠の軍事マニア（新健太郎）

第三章（海外冒険小説）驚は舞い降り、ヒトラーは甦る（佐藤卓己）

第四章（コミック&アニメ）デスラー総統はドイツ人か（戸松幸一・石田あゆ）

第五章（映画）銀幕に育まれたゴールデン・ボーイズ（宮武実知子）

第六章（パンク・ミュージック）絶叫パンクスは鉤十字がお好き？（戸松幸一）

第七章（オカルト&フリーメイソン）ヒトラーは UFO に乗ってやってくる（春川玄粋）

第八章（純文学&中間小説）日本文芸におけるナチズムの曳航（佐藤八寿子）

第九章（架空戦記）日本の敵はどいつだ？ — 日独決戦のゆくえ（石田あゆ）

第十章（インターネット）電脳ナチズムのインパクト（河崎吉紀）

ナチカル資料編

あとがき（佐藤卓己）

第十章以外の各章末尾に、日本のナチ・カルチャーの「供給者」10名に対するインタビュー記事

が、9つの「ナチな人々 File」という記事で添えられており、彼らがなぜナチズムに惹かれるのか、どのような意識で活動を行っているのかが探られている。巻末の「ナチカル資料編」には相当数のナチ・カルチャー作品等のリストが挙げられており、これはデータベースとして(ナチおたくにも研究者にも)役に立つ。

本書を読んで評者は二つの分裂した感情を抱いた。ひとつは「面白い」という感情、もうひとつは「危険性」を感じ「戸惑う」感情である。「面白い」と感じる理由はいくつかの要因からなっている。第一は、今まで誰も研究していない新分野であるから、第二に、日本の多様なナチ・カルチャーの全体像を多数の実例をあげて示した総合的調査であるからというものだ。第三は「ナチズム＝悪」としてしまふ記号化の問題を提起している点、第四は「ナチズムの美学」について考えるきっかけになる点である。実はこれらの点は、「面白い」と感じる要因であると同時に、この研究の「危うさ」や評者が感じる「疑念」にも通じている。それを列挙すると、第一にこの本はどのように読まれるかわからないが、そのことに執筆者や編者がどの程度自覚的であるかわからないという点である。第二は読者をどこに設定しているのか曖昧なために中途半端な記述になっている点である。第三はナチカルに結集する人々の「非政治性」の問題が分析不足であること、第四に「悪の魅力」の問題にどのように対処するかという問題に(編者は自分なりの答えを持っているようだが)具体的にはっきりと答えていないことである。以下、これらのことを論じてみよう。

第一に新分野・対象という点について。日本のナチ・カルチャーを研究できる分野としては、日本史、ドイツ研究、社会学があげられようが、そのどれもがこの問題を研究対象として取り上げてこなかった。日本史研究者にとっては、ナチ・カルチャーは外来のものであり、日本の独自性が見出しにくいので研究対象となりにくかった。ドイツ研究者にとっては、「ナチズム＝悪＝克服の対象」であり、日本のナチ・カルチャーはおぞましく否認すべきものであったし、なまじっかそれに関する研究を世に出すと、ナチおたくを危険な方向に目覚めさせてしまうのではという不安を抱えてきた。というのは、ドイツ研究者は、ドイツにおけるネオナチ現象を、そのまま日本のナチ・カルチャー現象にひきつけて解釈する傾向があるからだ。しかし評者の考えでは、サブカルチャーによるナチズム受容の質は、ドイツと日本では共通点よりも相違点の方が大きい(たとえば、日本のナチ信奉者や軍事おたくは、評者のみるところほぼ九割方ひよわなヤサ男であって、ドイツの暴力主義的なスキンヘッド系ネオナチと異なったタイプの人間である)。最後に日本をフィールドとする社会学は、外来要素のナチズムの記号的意味を読み取れず、ナチカルの出生地での意味と受容地での意味の差などに無頓着であるし、あるいはそういうことにあまり関心を抱いていない。したがって、盲点をついた本書の着眼点は鋭い。その点は高く評価できる。

第二に、実例に基づく日本のナチ・カルチャーの総合的調査という点について。本書は、後続の研究が依拠できるしっかりしたデータ収集という点で労作である。そして現時点でのできるだけ「中立的」な棚ざらえに徹している。そのことはプラスにもマイナスにも作用している。その両義性について説明しよう。第一に本格的な分析や結論はなく、各現象の解釈は「読者の自由」に任されている。しかしそうすると、そもそも社会的意義とか歴史的責任といった事柄に無関心で、自分の好き勝手に解釈する傾向の強いナチおたくに、都合のよいところだけを受け取られる恐れが大きい。この疑念を加速する要因が本書には少なくとも二つはある。ひとつは本書の想定読者層がはっきりしないという点である。研究者でも直接専門に関係ない人はこの本を買わないだろうし、ナチおたくは買うだろう、しかし本書がもっとも訴えかけたいと願う、既成の観念にとらわれずに大衆文化を考えたい人が、本当に本書を買って読むかは疑問である。二つ目の要因は、巻末の「ナ

チ・カルチャー資料集」の悪用の可能性がかなり大きい点である。ナチへの傾倒が単なる趣味の世界で収まっていればまだよい。インターネットを实际使ってみて実感するのは、このようなネットのすぐそばに、犯罪的な過激ポルノや暴力的なネオナチのネットが巣を張っていることだ。「それを取りしまれ」などというつもりはないが、危険なところに読者を誘っている点は自覚的であるべきではないだろうか。

「中立的」な棚ざらえへの両義性に対する疑問の第二は、執筆者によってニュアンスの違いがあり、それが本書全体の主張をわかりにくくしている点である。評者の読後感では、主張点がわかりやすい人(佐藤氏)、主張点があるがそれが例で実証されているのか疑問な人(新氏、河崎氏)、事実を例示するだけの状況報告のみに評者には思える人(羽柴氏ほか大多数の人)、と混在している。たしかに調査者が早急な評価付けをしない点はメリットもある。たとえばナチ・カルチャーの人にインタビューするときにこの態度は大切であり、それをよく守ったインタビュアーは、ナチ・カルチャーにはまった人々の本音や実態をうまく聞き出していると思う。しかし本書全体を通読してみると、そもそも執筆者各人が分担分野で結論を引き出そうとしているのか疑問に感じる。つまり問題提起はあっても答えが出せていないと思えるのだ。もしこの研究を継続するのならば中間報告としてこのような態度もよいと思うが、継続しないのであれば少し問題ではないだろうか。この成果が意図せぬ方向に「のっとられる」恐れがあるからだ。関連して、結論のはっきりしないままに実例のオン・パレードを読ませられるのは、ナチ・カルチャー趣味のない人にとっては、はっきり言ってしんどい。データ羅列方式は週刊誌的な書き方であり、もしその方式をとるならば、本書の各章は長すぎる。つまり学術的研究報告か週刊誌的情報提供か、どっちつかずのところがあるのだ。

さて、第三の「ナチズム＝悪」の記号化の問題点について。この問題をはっきり提起した点は本書の貢献であると思う。「ナチズム＝悪」と人々を「啓蒙」することが、逆効果を生み出す現象は、ドイツでも指摘されていた。1979年のTVドラマ「ホロコースト」の放映がきっかけで巻き起こった「あの時人々は何をしていたのか」という一大国民議論のときに、ナチ時代という自国の「負の歴史」を教えることを積極的に推進してきた熱心な中等教育の歴史教師たち自身が、ナチの暴虐性を実例を挙げて強調する「ショック療法」に弊害がある事実を述べていた。つまり、ショック療法は多くの生徒には効果的であっても、必ず暴虐性の実例に耐えられずにドイツ現代史そのものを学ばなくなる生徒や、「私には無関係」としてナチ的なものを自分の問題として考えない生徒、ナチズムは怖いけれど、いや怖いからこそ惹かれてゆき「悪の美学」のとりことなる生徒を生み出してしまふというのである。歴史教師のはしぐれとして評者もこの点は感じている。また、ナチ政策の実証研究が進めば進むほど、研究の成果と教育界での通念が乖離していく感覚を抱いている。ナチズムは思想的には他の多くの思想と共通点をもっており、ナチ独自の要素はほぼ皆無なことや、ナチ時代の独自性はむしろ「実行力」と「制度化による認証」の点にあること、つまりナチズムは他の類似の思想・運動・体制と比較不可能な「極悪」とはいえないことが、次第に研究界の常識になりつつある。しかしこの歴史研究界の認識が教育(とくに政治教育)に生かされておらず、教師がナチ時代を歴史的教訓として「暗黒」に描くことが現在でも一般的である。そうするとナチ時代のイメージは実態と乖離してゆき、本来の意味での「歴史から学ぶ」ことが阻害され、現在におけるナチ的要素の危険性に無自覚になる。これも「ナチズム＝悪」の記号化の弊害といえよう。

第四の「ナチズムの美学」の問題について。多くの人々がなぜ現在もなおナチズムに惹かれるのだろうか。よくあげられているのが、「悪だから」「かつこいいから」「少数派に属する優越感」「ナチの知名度の高さ」などだが、傑出しているのが「かつこよさ」である。つまり「善・悪」の理性軸では

なく、「美・醜」や「好き・嫌い」の感性軸で判断している。こうして「ナチズムの美学」の問題につきあたる。ここで評者はナチズム体験者が感性のレベルでナチズムに惹かれた要因を挙げ、それを現在のナチ・カルチャーの人々の状況と比較してみたい。ナチズム体験者たちに関する研究によれば、ナチズムの魅力は、「私が私たちに包み込まれる感覚」(共同体感覚)や、思索ではなく体験重視(参加の感動)、活動的で変化に富み現状打破力がある(躍動や破壊の美学)、知性でなくて肉体の賛美(若々しさや健康の美)、新メディアや新テクノロジーの活用(現代性・技術重視・合理性)、大衆消費社会の先駆(豊かさへの憧れ)、反エリート主義的で一般人からなるナチ党(親近感)、主張の白黒的わかりやすさ(明快さ)などである。以上の要素(カッコ内の項目)が、現在のナチ・カルチャーに当てはまるかどうか考えてみると、評者の考えでは、「躍動・破壊」、「現代性・合理性」(今日ではレトロな感じもするが)、「明快さ」は当てはまると思えるが、「共同体意識」(彼らは孤立している)、「参加」(今日ナチ時代のような直接参加は不可能である)、「豊かさへの憧れ」(日本はすでに豊かである)は当てはまると思えない(だからこそそういうものに憧れる、という面はある)。そうすると、当時ナチズムに惹かれた人々と現在のナチ・カルチャーの人々とは、魅力の内容が異なっているように評者には思える。

第五に、ナチ・カルチャーに結集する人の「非政治性」の問題について。本書全体のトーンから、また特にインタビュー記事で、ナチ・カルチャーの担い手が「非政治的」であることが指摘されている。しかし彼らは本音を語っているのかは今一步検証が必要である。また「非政治性」がもつ「政治性」の検証はなされていない。評者自身はこのインタビュー記事は非常に興味深かった。インタビュー相手は、予想とかなり異なりナチ・カルチャーに非常に冷静な人と、比較的類推可能な「無邪気な熱中型」の二タイプに分かれている。右翼は暴力団だから差異化するために極右にいったと言う世界戦略研究所代表者や、材料があつて職場で命令されたからナチ軍事雑誌を編集した編集長、ナチ思想には普遍性がある部分と時代に限定された部分があり、ナチズムは人種論でありわれわれ日本人は黄色人種だからシンパシーを抱けても理論的にナチたりえないと明言するヒトラー研究者、ナチが正しかったとか悪かったとかをいうために描いているのではなく、単に人物像を描きたいからというコミック・マーケット代表者、業界や客層をかなりシニカルに見ている軍装ショップの店長などは、非常に冷静に事態を認識している。他方、模型好きが嵩じてこの世界に入ったナチ兵器マニアや、善玉を引き立てる悪役の「悪」に魅了されて描く漫画家、ヒトラーはカッコいいとデザイン的に引かれるヒトラー信奉者の若者などは、こんなに単純でよいのかと思うほど単純でわかりやすい。前者のタイプには彼らの表現する「非政治性」が本音であるかどうか検証が必要だと思う。後者のタイプには「非政治性」がもっている「政治性」を執筆者は考察すべきであろう。この点は歴史研究でも重要な論点になっているからだ。

最後にもっとも重大な「<悪>の魅力」について。本書はその問題点を示唆し、その克服の仕方について「不マジメな反ナチ」の市民権を要求する。その指摘は大いに評価するが、そこから今一步考察がほしい。評者の考えを述べてみたい。ナチズムが悪いことをしたということを十分知った上でなお、なぜ彼らはナチズムに惹かれてしまうのだろうか。そこには美学だけではない、「悪」そのものももつ「魅力」があるからだと思っている。ナチ・カルチャーにはまる人は、ほとんど青少年期に興味をもつようになる。その意味で言うと、ナチ・カルチャーに至る心理は、大人の心理よりも青少年心理に糸口がある。評者は、心理学者の河合隼雄が書いた『子どもと悪』(岩波書店、1997年)が、人はなぜ「悪」を憎みながらも「悪」に惹かれるのかの問題に、ひとつの重要なヒントを与えていると思う。河合氏は、子どもが「悪」を犯すときには、必ずそこに現在の自分を

打ち破ろうという「成長の芽」があり、「悪事」とはどのように現在の自分を突破するかのひとつの表れだという。「善行」は類推がつくが「悪行」は予測不可能で、「悪」には創造力がある。「悪人」がもっているパワーの大きさも「悪」の魅力のひとつである。もちろん犯すと取り返しのつかない「絶対悪」(たとえば殺人)があり、それを試行錯誤で自覚していくのが成長過程である。以上のような河合氏の「子供の悪」論は刺激的である。評者は、「ナチ＝悪」としても「悪に惹かれるな」と言うほうが多分無理だと思う。むしろナチズムに仮託しなければ現在の自己を突破できない人の頭を「柔らかくする」(現状突破にはいろいろな方法があると気づかせる)ことのほうが有効であるし、取り返しのつかない「絶対悪」に至らないバランス感覚(他の存在への想像力など)を会得させることのほうが、ナチ・カルチャー予備軍の青少年にとって重要ではないかと思っている。なぜなら、「魅力」のあるものはかならず「危険性」を含んでおり、必要なのは「危険性」を排除することではなく、「危険性」を自覚することだと思うからである。

いずれにせよ、本書はいろいろな意味で実に刺激的な本である。